

# Iris Murdoch の ‘Under the Net’

その主題の展開を追って

小 林 祐 二

## まえがき

主人公 Jake は、以前に作家としての成功の夢を託して書いた対話風の作品 ‘The Silencer’ の中で、Tamarus という人物に自分の意見を代弁させて、人生について、つぎのように述べる。

But life has to be lived, and to be lived it has to be understood. This process is called civilization. (p. 90)\*

この ‘The Silencer’ は、その成立過程と内容そのものの中に、この小説の主題にかかわる重大な意味を含んでいて、この小説の *Under the Net* という題名もその中からとられているのであるが、それについては後で述べるつもりである。

いま、ここで指摘したいのは、このような命題を発した人間が、この小説の主人公 Jake のように、現実から逃避して、それと遊離した概念の世界に閉塞している場合、この命題と、その人間の日常生活との距離を埋めつくすべきものは何かという問題である。

Iris Murdoch は、まず Jake を、彼をとりまく現実の世界にひき出し、彼がそこで演じる喜劇を描き出す。Jake は喜劇を演じながら、「生きる」ことの意味への問いかけを、彼の概念の世界から現実の生活の中へとひき出していく。この小説の中で、その Jake の生活の軌跡をたどり終えたとき、読者はようやく、作家 Iris Murdoch が、先にかかげた命題を眼前にすえて、作家として出発したことを理解しはじめるのである。

‘Philosophical novelist’ という呼び名が Iris Murdoch に与えられているが、これは、哲学者としての作者が、その哲学理論のもうひとつの表現手段として小説を選んだということなのであろうか。Iris Murdoch 自身は、その意味でのこの呼び名を拒否しているといわれる。あるいは、哲学の中に包含しきれない現実の人間生活を描くための相補的な意義を小説という表現形式に求めているのであろうか。ここでこのように、philosophical novelist という呼び名にこだわるのは、その呼び名の意味が、彼女のこの小説の主題と深い関連をもっていると思われるからである。

ことばを媒介として、人間の問題を、その高度の抽象化を通して客観的な認識にいたるまで総合統一するはずの哲学・思想が、現実の生活の中での諸体験と対立的または遊離してとらえられるにいたるとき——そして Jake はまさにそのような人物として登場するのであるが——それは人間の生活から浮遊し、枯渇するであろうし、現実の生活は、個々の無意味な体験の散乱と化するであろう。哲学者 Iris Murdoch が、「生きる」ことの意味を小説という表現形式によって問いつめていく方向は、彼女が、‘Thinking and Language’ の中で Wittgenstein に代表される論理哲学への批判を暗示しながら、思考と言語の関連について、示唆に富んだ提言を展開してい

\* 以下引用文は、*Under the Net*, Chatto & Windus 1969 によった。

る中にすでに見られるといえよう。彼女の小説家としての出発は、哲学の位置づけを再確認することへの警鐘の意味もあるといえるのではなからうか。

この小説では、まず、Jake の生活は、概念と現実とが分離した状態として描かれる。Iris Murdoch は、Jake がこの分裂した状態に気づきはじめ、現実の経験と概念の世界とを結ぶ動脈を蘇生させる方向へと眼を開きはじめる過程を描き進めていくのである。この小説は、いわば人間の現実生活と概念の世界との靱帯の復活を通しての、人間生活そのものの復活を主題とした小説であるといえよう。

1954 年に書かれたこの小説は、その意味で、50 年代という時代区分のわくをのりこえた普遍性を持ち、現在その存在理由をますます増しているし、またこれに続く Iris Murdoch の 12 の諸作品の主題の基底をなしていると考えられる。

これから先、わたくしは、その主題にかかわるいくつかの面をとりあげ、その展開を追い進めつつ、現在のわれわれの生活の中におけるこの作品の意義を見定めたい。そしてこれに続く Iris Murdoch の諸作品理解へのわたくし自身のための端緒としたい。

1972 年 1 月

## 目 次

1. Jake の自己紹介 .....	p. 128
2. 主題との出会い	
—Anna と Hugo, <i>The Silencer</i> — .....	p. 131
3. <i>The Silencer</i> .....	p. 136
4. The Net からの脱出へ .....	p. 139
5. 現実への根づけ .....	p. 144
6. あとがき .....	p. 149
参 考 書 目 .....	p. 150

## 1. Jake の自己紹介

この小説は、主人公、James Donaghue、すなわち Jake の「語り」を通して、バリ祭前後の3週間ほどの彼自身の生活をほとんど限なく示すことによって成り立っている。無頼な知識人の典型的な人物 Jake を主人公として、悪漢小説風の語り口で語り進められていくが、その主題が次第に浮き出てくるにつれて、この主人公の人物設定と事件展開によって描き出されるいくつもの喜劇的場面は、きわめて自然で生き生きとした現実感をもちながら、作家の予定していた象徴性を帯びてくることに読者は気づきはじめる。

Jake は鋭い感受性と確かな表現力をそなえていて、自分の性格や、置かれた状況を活写しては見えるが、そうして明らかにされた生活を内省して眺めることはしないし、その根無し草のような寄生生活から脱出しようなどという意志は毛頭ない。自らを三文文士と呼んではばからない無頼な知識人として登場する。彼は知識人の冷やかさと、皮肉な眼を通して自分の生活を解釈して見せる。この Jake の「語り」が、読者をすでに小説の発端でひきつけてしまうが、それは彼の「語り」の中に読みとれる彼の「無頼の誠実さ」\*とでも呼ばれるものためであろう。読者はすでにここで Jake 自身の視点に立たされてしまう。しかし、その視点は次第に上昇し、終局においてその止るところは Iris Murdoch の視点となる。わたくしは、その Iris Murdoch の視点から眺めながら、Jake の歩む軌跡を追いつめていきたい。まず彼の自己紹介の部分を通じて、問題点を指摘しよう。

What is more important for the purposes of this tale, I have shattered nerves. Never mind how I got them. That's another story, and I'm not telling you the whole story of my life. I have them; and one effect of this is that I can't bear being alone for long. That's why Finn is so useful to me. We sit together for hours, sometimes without uttering a word. I am thinking perhaps about God, freedom, and immortality. What Finn would be thinking about I don't know. But more than this, I hate living in a strange house, I love to be protected. I am therefore a parasite, and live usually in my friends' houses. This is financially convenient also. I am not unwelcome because my habits are quiet and Finn can do odd jobs. (pp. 23—24)

これは、Jake の自己紹介の後半である。ここには、Jake が自分の寄生的生活について内省することを拒否する態度、好悪の感情が生活の基準になっていること、そして神経症があり、そのため長時間の孤独には耐えられないといいながら、もっとも身近かに生活する Finn に対してさえ無関心な生活ぶりが示されている。実はこの生活の中に、Iris Murdoch がこの小説を書くにあたっての動機がかくされているのである。その点ををもっとくわしく考察するために、この自

\* Kenneth Allsop : *The Angry Decade*

己紹介の前後を要約しながら見ていきたい。

Jake は、いままで1年半にわたって、彼の遠縁と自称する Ireland 出身の Finn とともに、Earls Court Road に住む女優志望のタイピスト Madge のところに無料で居すわっていた。Madge は最近になって、結婚相手としては、Jake に見切りをつけ、彼女の志望を満たしてくれそうな方面に糸をひく、金まわりもいい Sammy を男友だちの中から選んで、彼と結婚することにする。そこで Jake と Finn は彼女に追い出されたのである。寄食者としての寝ぐらさえも奮われた Jake にとって、第一の問題はつぎの寄生の寝ぐらを得ることではない。30才を過ぎた作家として、才能を自認しながらも、いかがわしいと想像されるが、とにかく売れ行きのいいフランスの小説を翻訳しながら、わずかに収入を得て、創作活動は極力さげ、女の家へ寄食してきた。それを Madge になじられても、それを甘受して、つぎの寝ぐらを求めて、やおら動き出すのである。ここには、自分をとりまく現実の世界とのかかわりから逃避して、寄生生活の中に閉塞しようとする生活の連続があるのみである。

彼はまた、生活に規範を与えるような理念には不信を抱き、それを嘲笑さえる。先の引用文の中で、‘I am thinking perhaps about God, Freedom, and immortality.’ ということばの中にはその響きがある。この「神、自由、不滅」は、明らかに Kant の「三つの理性の理念」をさして、それに対する冷笑がうかがえる。

さらに、前述のように、もっとも身近かに生活する Finn については、その考えていることが何であるかを推し測ることもしない。そして、神経症のために長時間の孤独には耐えられないでいるときの不安を除いてくれる「手段」としてしか Finn を見なさない。‘…I can't bear being alone for long. That is why Finn is so useful to me.’ ここでも、「あらゆるひとびとを、各人そのものが目的であるとして扱うべきである」という例の道徳律と自分の他者に対する態度とを意識的に対置しながら見せる冷笑がうかがえる。

この他者に対する無関心は、彼の「ことば」に対する不信と無関係ではない。彼はことばを軽視する。このことばに対する不信と軽視は、翻訳の仕事について述べるつぎの表現の中に見られる。

Also, in a perverse way, I just enjoy translating, it is like opening one's mouth and hearing someone else's voice emerge. (p. 22)

彼の生活の中からは、人間が自分をとりまく現実とのかかわりを通して得る経験と、それを内省し、統一し、定着させた思想や理念を表出する実体としてことばをとらえるという考えは出てこない。だから彼は、小説を書く意味を否定さえるのである。

At that time I naively imagined that there was no reason why one should not attempt to write anything that one felt inclined to write. But nothing is more paralysing than a sense of historical perspective, especially in literary matters. At a certain point perhaps

one ought simply to stop reflecting. I had contrived in fact to stop myself just short of the point at which it would have become clear to me that the present age was not one in which it was possible to write a novel. (p. 21)

前述のように、ことばを軽視し、さらにはこのように創作活動の意義を見失ったことは、内省を否定することと同時に書くという仕事を歴史的視野の中に位置づけて見ようとする彼の態度と不可分に結びついている。

このことは、この小説が発表されたのが 1954 年であること、Jake が 30 数才であることと無関係ではあるまい。Jake はやはり、the Decade of the Angry Young Men の文学的風土から生まれた小説の主人公なのである。

わたくしは、いま、その文学的風土と、そこから生まれた多くの主人公たちについて多くを語る力も用意もないが、Kenneth Allsop が、分析と総合の見事な均衡の上に立って、適確にこれら the Angry Young Men と、かれらが描き出した主人公たちの特性をえぐり出して見せてくれた *The Angry Decade* をかりていえば、かれらは、20 年代と 30 年代の前半に生まれ、つねに破局へと向って流される世界の危機の中で生長してきた。そして、大部分のものは、working class または lower middle class の出身であり、第二次大戦の後半には、何らかの形でそれにかかわった。戦後は福祉国家の恩恵に浴して、高等教育まで受けながらも、かれらにそのような条件を整えてくれた年代、すなわち、the moderate Trade Union socialism に信頼をおいた idealists たちの年代とは同化できない若者たちなのである。いわば福祉国家の希薄な教育にわざわざいされた「根無し草の、信条ももてない、どの階級にも属せない年代の若者たち」なのである\*1。

Jake が根無し草の寄生生活を送る自分に対して向ける冷やかな自嘲のまなざし、現実と概念の世界との断絶に対して見せる皮肉な不毛な嘲笑など、彼が自己紹介の中で示す性格は、Kenneth Allsop のこの解説にそのままあてはまる。K. Allsop は 'renegading from the hereditary' と批判し、Jake は自ら、a sense of historical perspective は paralysing だときめつける。これは、「まえがき」で示した Jake 自らの定義になる civilization から自分を切断することであり、未来への期待を放棄することであろう。Jake のこの側面の描出にあたっては、Iris Murdoch がその影響を自ら認めているという\*2 Simone Weil のつぎのようなことばが作家の想念の中で重なり合っていると考えられる。

Il serait vain de détourner du passé pour ne penser qu'à l'avenir. C'est une illusion dangereuse de croire qu'il y ait même là une possibilité... Mais pour donner il faut posséder, et nous ne possédons d'autre vie, d'autre sève, que les trésors hérités du passé et

\*1 Kenneth Allsop : *The Angry Decade*, (p. 27)

\*2 A. S. Byatt : *Degrees of Freedom*, (p. 44)

Rubin Rabinovitz : *Iris Murdoch*

Iris Murdoch : *The Idea of Perfection, On 'God' and 'Good'*

digérés, assimilés, recrées par nous. De tous les besoins de l'âme humaine, il n'y a pas de plus vital que le passé.\*

このように、Jake の自己紹介を眺めてくると、そこには、Iris Murdoch がつぎのような諸点を問題として内在させていると考えられる。すなわち (1) Jake が根無し草の、寄生生活の中に閉塞していること。(2) 他者の存在を自分の生活の段と見なしていること。(3) 現実と概念の世界との結びつきに無関心であること。(4) 自分の生活や仕事を歴史的な視野の中に位置づけ得ないこと。(5) 小説家としての感受性と表現力はあるながら、ことばに対して抜きがたい不信を抱いていることである。そしてこれらに対する批判はそのまま、Iris Murdoch がこの小説を書くにあたっての動機となっていると考えることができる。それらは、いままで見てきたように Jake の生活の中に離れがたく結びつきながら混在している。やがて Jake がその住居を追われたことを発端として、現実の中に歩み出て、きわめて鎖末な行為において現実に足をすくわれながら演じる喜劇を通して、この動機は大きな主題へと発展して、読者の前に現われてくるのである。そしてそれは、Jake が恋人の Anna を追い求めながら描く愛を求めての行動の軌跡と、Hugo を追い求めながら、彼の概念の世界と現実生活との間の空洞に気づき、それを埋めつくしていく経験過程の重大さ、すなわち、生きることの意味を悟り始めるにいたる行動の軌跡とが二本の縦糸となって、ない合わされていくのである。

## 2. 主題との出会い

### —Anna と Hugo, *The Silencer*—

Jake はつぎの寄生の場を、友人でユダヤ人の哲学教師 Dave のもとに求めていく。Jake は Dave が自分とはつぎの点で特に対照的であると思っている。すなわち、Dave はユダヤ人であるが故に、生来、歴史的視野の中に自己の存在を位置づけることができること、また Jake の嫌う日常の偶然性の中に身を置いて生活できるということである。だから Dave は Earls Court の西の雑然たる家並の中に住み、多くの学生、芸術家、知識人、政治関係の人々と交際を続けることができるのだと Jake は思う。Jake は Dave をつぎのように批判する。

I hate contingency. I want everything in my life to have a sufficient reason. (p. 26)

This (The hum of Dave's pupils' voices in his room) displeased me. Dave knows far too many people... I myself would think it immoral to be intimate with more than four people at any given time. (p. 26)

日常生活の contingency (偶然性) を嫌い、生活のすべてに論理を主張しながら、寄生生活に

\* Simone Weil : *L'enracinement*, p. 51



執着する Jake に、Dave は定職をもって働くことをすすめ、彼に住居を提供することを断る。このとき、Finn がふと口にした ‘Try Anna Quentin.’ という助言が、かつての恋人 Anna を追い求めるきっかけとなるのである。この小説の Jake の行為のすべてを支配することとなる Anna 追求のきっかけをつくったのは、論理ではなく偶然である。これから先、彼の行動を左右するものは、彼の嫌う偶然性であり、彼はこの偶然にほんろろされる経験過程をくぐりながら、やがて自分の生存をかけて凝結させるべき決断の意味を考えざるを得なくなるのであるが、そのことは後でさらに触れたいと思う。

Anna は Jake より 6 才年上の歌手である。かつての彼の Anna に対する愛は、自分の生活の中に Anna が入りこんでくることに彼が恐れを感じたときに終わったのである。彼は Anna を探し求める道すがら、彼女との結婚まで考えながら Anna と別れたときのいきさつをつぎのように回想する。

But marriage remains for me an idea of Reason, a concept which may regulate but not constitute my life. I cannot help, whenever I consider a woman, using the possibility of marriage as an illuminating hypothesis which is not in any sense an instrument of the actual. . . . The substance of my life is a private conversation with myself which to turn into a dialogue would be equivalent to self-destruction. The company which I need is the company which a pub or café will provide. (p. 34)

ここでも、an idea of Reason ということばが、Kant に対する嘲笑を含んでいることを暗示しているが、彼自身自分の生活の実体と概念を個別的にとらえていることには変りがない。Jake にとって、結婚は、現実から浮遊した概念界にしか存在しない。そしてその彼の生活の実体とは、他者との関係を遮断することによってまもられる自分だけの生活である。一方において孤独を恐れながら、他者との親密な結びつきは拒絶する。彼には、概念が、日常生活の中の体験の中から析出されて、ことばによって統一され、結晶した実体としては存在しない。彼によれば、彼の生活の実体とは、自分自身とのひそかな対話であって、それをことばとして表出することさえ自滅に等しいというのである。

これは、第1章で「Jake はことばを軽視する」と指摘したことと根本的につながる問題である。自己表出さえも自滅と考えることばへの不信は現実感覚の喪失につながるであろう。だが、書くことを仕事とするものとして、ことばへの不信を、ことばのもつ否定的な条件、あるいは限界としてとらえなおして、それをのりこえて自己表出へ向うときの苦悩は、このときの Jake には無縁のものである。だから、前出の引用文の中でのように、現実生活と概念との乖離を意識はしても、それが「根無し草の生活」からの脱出へとは向かわないのである。1951年に書かれた、作者の ‘Thinking and Language’ の結語は、すでにこの Jake の生き方に対する哲学者 Iris Murdoch の鋭い批判のまなざしを感じさせる。

It need not be assumed that a certain kind of logical technique offers the only method of dealing with “mental phenomena”. This technique moreover goes with a verificationist attitude and a dualistic view of language and the world which may be challenged. A more naively empirical approach may reveal to us problems, about the characterisation of thought, the nature of concepts, the rôle of metaphor, which are still worth investigation. It will also suggest to us the method of investigation, which will involve a study, a developing and vindicating of our ordinary and familiar linguistic habits.

ことばへの不信と現実感覚を喪失し、概念操作の中にも閉塞する Jake の生活の中では、Finn との人間関係が根づくはずはなく、ましてや Anna との結婚も根つき得ないのである。だから、Jake にとって、人間関係は、The company which I need is the company of a pub or a café will provide. と矮小化せざるを得ない。

Jake は、Goldhawk Road の Dave の部屋を出て、Soho 地区の周辺の Brewer St., Old Compton St., Greek St. と Anna を探し歩く。そしてついに Hammersmith で ‘Mime Theatre’ と称して実験的な演劇を試みている Anna と数年ぶりに再会する。

ここで少し横道にそれるようであるが、Jake が Anna と Hugo を探して、London の通りを縦横に動きまわりながら見せる彼の正確な地理的な知識について触れておきたい。そのためには、また、Iris Murdoch の小説と彼女の哲学との関連を詳細に検討する必要があり、その方面からの論述は、Peter Wolfe の *The Disciplined Heart: Iris Murdoch and Her Novels* に詳しいが、ここでは、次の点の指摘に止めたい。

Peter Wolfe は Iris Murdoch と Bertrand Russell との関連の深さにふれ、‘The significant difference between the two writers, supplied by the rhetorical media they have chosen, is method.’ (p. 5) とまで述べ、その方法の違いを、Russell が analytic な方向に向うのに対して、Iris Murdoch は synthetic な方向を目指しているといっている。しかし実は、この分析的であるか、総合的であるかの問題は、単に問題追究の方法の差異として指摘することのみに止ってはならない。Iris Murdoch 自身は、‘*The Sovereignty of Good*’の中で、「愛」や「行為への決断」の問題を、倫理的な観点から論じ、その点では、Russell および Wittgenstein は、経験主義に依拠して、倫理の問題を哲学の外に押し出してしまったことを批判している。人間存在をとりまく状況の認識にあたっての、Russell や Wittgenstein の分析的方法を認めながらも、「愛」や「行為への決断」そのものの把握は、その方法の限界を越えたところにあるとし、彼女自身は、その点でも、Simone Weil に負うていることに言及している\*。

Empiricism, especially in the form given to it by Russell, and later by Wittgenstein, thrust ethics almost out of philosophy. Moral judgements were not factual, or truthful,

\* *The Sovereignty of Good*, p. 50

and had no place in the world of *Tractatus*. (p. 48)

Russell および Wittgenstein から Simone Weil への距離は短かく見えながら、両者をへだてる深淵は深い。Iris Murdoch は、この深淵を渡るかけ橋を見出そうと目指しているようである。わたくしがここで指摘したいのは、その深淵の手前の領域、すなわち、人間存在の状況を認識する領域という限定を置いた上では、この Jake の地理的な正確な知識は、他の類似の場面と同様、ひとつの象徴的な意味をもって、それがこの小説の終局に見られる「愛」の認識に逢着する場合と同様、Bertrand Russell の認識論と同一の方向が見られると考えるからである。

Bertrand Russell は *On the Nature of Acquaintance* の中で、William James が Memorial Hall とそこへ至る道筋とを例にあげて、認識の過程を論述している中では「記述による知識」と「経験による知識」と混同していることを批判し、さらに、W. James がいう「ある対象を知る」ことを「経験による知識」の意味に限定しても、それは、「その対象そのもの」とは異なることを詳述している。Jake が地理的な知識を駆使して、Anna の住居を探しあてようとするときの異常なまでの熱意は、Bertrand Russell の指摘する上記の混同と無差別の認識の中での盲目的なあがきを象徴しているかに見える。

その Jake が、驚くべき敏捷さと正確さで、London の通りを動きまわる途上で語る Anna に対する愛の表現は、Jake が「記述による知識」すなわち、「～についての知識」をもって、Anna と彼女に対する「愛そのもの」を理解し得ていると錯覚している事実を如実に示している。

Dave once said to me that to find a person inexhaustible is simply the definition of love, so perhaps I loved Anna. (p. 31)

「愛」を単純な定義によって片づける Jake にとっては、「愛する」という人間関係の中で、自分が Anna とどうかかわり合うのかは決して定かではない。

前述のように、Jake の生活の中には、Anna や Finn のみならず、他者が存在する余地はない。Finn のふと発した ‘Try Anna Quentin.’ ということばによって、Jake 自ら like one of Heisenberg’s electrons と評するように駆けまわりながら、求めるものは、つぎの寄生の場所ではない。その Jake が、Anna を何年ぶりかで思い出したことを、Indeed, it was unclear to me how I had managed to exist without her so long. と意義づけて Anna の住所をつきとめようとする。この Jake のことばを読むとき読者は、「ことば」が、context を離れてもち得る意味の重さと Jake の他者理解の軽佻浮華さとが対比されていることに気づくであろう。

ようやく Mime Theatre の彼女の部屋で Anna と再会するが、「愛について」しか語れない Jake に、Anna はいうのである。

‘Love is not a feeling. It can be tested. Love is action, it is silence. It’s not the emotional straining and scheming for possession that you used to think it was.’

‘Unsatisfied love is concerned with understanding. Only if it is all, all understanding, can it remain love while being unsatisfied.’ (p. 40)

実は、この Anna のことばは、Jake にとって重大な意味を含んでいる。直接には、先に述べてきた、Jake の現実の人間関係とは遊離した空虚な「愛」の概念に対置された「愛」の在り方を提示しているが、それと同時に、このことばは、Jake がかつて Hugo との対話をもとにして書きあげた、後に述べる *The Silencer* の中の Hugo の考え方とそっくり一致していることである。‘Silence’ という語が Jake の心に波紋を生じさせ、それはやがて、Jake が Hugo を探し求める方向へと彼をひき出す遠因となる。Anna の助言をうけて、住居を、Anna の妹で、そのあでやかな容姿と狡知を利して、人気女優の座を得ている Sadie のもとに求めていった Jake は、Sadie から Hugo が彼女の後を執ように追いまわしていることをきかされると同時に、彼女の部屋にあった *The Silencer* を久しぶりですることとなる。生活のすべてに論理を求める Jake ではあるが、現実には論理から導き出される結論とはまったく無縁な、偶然の重なりにより左右されて、Anna と *The Silencer* との再会が果される。

*The Silencer* は、概念および論理と現実生活の偶然性と個別性との屹立した対立の問題を内包しており、Jake が作家としての野望をかけて出版した作品であった。しかし、これは Hugo の意見の剽窃であるばかりでなく、その正確な描出でさえもないという、うしろめたさがありながら、Hugo に無断で出版したことに対する罪悪感と、批評界の不評としかもたらさなかった作品である。いま、*The Silencer* を手にして、Jake は二つの仮説をつくり上げる。ひとつは、Anna の愛についてのことばと Sadie の話とから、Hugo が愛しているのは Anna であり、Anna の Mime Theatre は Hugo の考えを具現したものであり、Anna の愛についてのことばは Hugo の口まねであるということ。もうひとつは、Hugo に会えば、*The Silencer* にもっと彫琢を加えることができるだろうということである。これが事実とはまったく異なる彼の幻想に過ぎないことは、この小説の終局で明らかにされるのであるが、この仮説が、いまは、Hugo に会いたいという気持へ彼をかりたてていく。この時点から、Jake の住居を求める行動が、Hugo 追求のそれへと変質する。Jake 自身、As my acquaintance with Hugo is the central theme of this book,.....(p. 53) と述べているが、この変質を通して、小説の構成の上からは、Jake の Anna との再会が愛の主題に逢着したことを意味し、*The Silencer* との出会いは、「概念の世界」と「現実生活」との結合を求めるという主題に逢着したことを意味する。しかし、この時点での Jake 自身にとっては、その意味は明らかではない。

It seemed to me that after all I just wanted to see him because I wanted to see him. The bullfighter in the ring cannot explain why it is that he wants to touch the bull. Hugo was my destiny. (p. 101)

すでに、彼のこのことばは、無意識のうちに、論理の放棄を端的に語っていることは明らかであるが、そればかりでなく、Iris Murdoch は、ここに二重の意味をもたせていると考えられる。ひとつには、*The Silencer* との邂逅は、Hugo の主張する「なまなましい現実」と、Jake のいままでの「概念と論理の網につつまれた生活」との接点に「Jake がたちいたったこと、そして、そこまでの Jake の経験過程の総体が、この邂逅とかかわっていることを暗示している。いまひとつは、その邂逅と、それによって触発された、かつて Hugo が提示した現実とのかかわりへの希求が、Jake の内部に蠢動し始めたこと、そして、それは、Jake のいう論理をこえた、人間の「生」への希求を、一瞬彼がとらえ得たということである。しかし、いまの Jake には、それを、‘want to touch the bull,’ あるいは、‘Hugo is my destiny.’ という、きわめて雑駁な表現によってしかあらわし得ないのではあるが。Sadie に、知らぬ間に閉じこめられた彼女の部屋から、Finn と Dave に助け出されるという喜劇的な場面と相まって、前掲の Jake のことばの解釈については、その直前のつぎの叙述がそれを裏づけている。

During the afternoon it had crossed my mind that Hugo might have a great deal more to teach me; the more so, as my own perspective had altered since the days of our earlier talks, I had seen this in a flash when I had re-read, after so long, a piece of the dialogue. My appetite for Hugo's conversation was not blunted. There might be more speech between us yet. Was it this then that made me seek him with such a feverish urgency? (p. 101)

Jake はここで、自分の行く手に茫漠として、氷山の如くに立ちほだかる Hugo, *The Silencer* を認め、その追求の途につく。それは、まさしく、この小説の構成の上では、主題の設定にほかならない。

### 3. *The Silencer*

前章では、Jake が数年ぶりに *The Silencer* を手にしたとき、それは Jake にとっては、概念および論理と日常生活の偶然性と個別性の問題への逢着であること、そしてそれが、この小説としては、主題設定の意味であることを指摘した。この *The Silencer* の内容とその成立過程は、Jake がこの小説に登場する以前の彼の生活を象徴している。と同時に、その内容を代弁する Hugo を Jake が追求する過程が、Jake の人生の意味の新たな発見の道程を象徴していて、それがこの小説の内容となっている。その意味で、*The Silencer* の成立過程とその内容について考察しながら、この小説の主題にもう一步近づきたいと思う。まず Jake 自身はこの *The Silencer* を Hugo の考えの剽窃とまで考えたがその Hugo について見ていきたい。

Hugo の両親はドイツ人で、彼は父親が経営したかなり大きな兵器産業の会社を受けついだ

が、彼自身は平和主義者で、その会社から離れ、ロケット工場を経営するかたわら、花火、とくに仕掛花火の製作に熱中するようになる。この仕掛花火に熱中することは、彼の美意識、芸術観と結びついているのである。一瞬にして消え去る美の発現こそ、芸術の真髄と考えるのである。Peter Wolfe はこの Hugo の考えは、Jake が最後に到達する「現実の認識は瞬時的なものである」という理解と呼応すること、そしてそれはまた、Bertrand Russell の認識論と重なるものであると指摘している\*。

Hugo は、仕掛花火が広くもてはやされるようになると、まったくそれを捨て去ってしまう。Hugo は Jake と同様、神経症的なところがあり、平常の快適な休暇を過すことができず、たまたま感冒治療実験所のモルモットの被験者となってそこに入りこんでいる。そこで Jake とはじめて会う。そこでは、モルモットになっていれば、食と住は無料で過ごせる。Jake にとっては、金のないときのうってつけの避難所で、彼は仕事まで持ちこんでそこを利用していたのである。The Silencer は、そこでの、まったく異常なまでの熱中ぶりで交わされた二人の議論をもとにして、Jake が書きあげたものである。

Jake は自分の主張を Tamarus という人物に語らせ、Hugo のそれを Annadine によって語らせる対話風の作品である。

長々と The Silencer の書かれるまでいきさつを述べたが、それは、このいきさつをそこで論じられている問題と対比してみたとき、両者の間の断絶がそのまま、Jake の自己中心的な、概念および論理と現実との遊離した生活と対応するからである。

Jake と Hugo が、日常生活とは隔離された場所で、モルモットとして感冒の病菌と治療液とを交互に注入されながら論じた内容は、「概念の意味；相互理解；真実とことば；論理と現実；状況と決断；発話と沈黙」の問題である。これらの問題は、第1章で、Jake の生活の中に混在するこの小説自体が書かれた動因として指摘した問題そのものと重なっている。

The Silencer の中で、Jake すなわち Tamarus は論理とことばが、真実の把握と人間の行為への決断に対してもつ有効性を主張するのに対して、Hugo すなわち Annadine は、人間生活の各状況の個別性と、決断に対しての論理の不毛と、真実の表出の手段としてのことばの限界を主張し、‘silence’（沈黙）こそ真実表出への方法だと主張する。

Hugo は、現実に現われる各状況の個別性を洞察して、Jake のいうように論理によって組み立てられた概念は、人間がたち向う各状況を正確にとらえるどころか、それを歪めるものだという。

この Hugo の考え方は、この小説において、Iris Murdoch がわれわれに提示する彼女の視点の在りかを指し示していると考えられる。しかし、Hugo の場合、彼が主張する現実の概念そのものを熟視し、そこをうめつくすものは何であるかを把握しようとする方向性にかけている。A. S. Byatt は Iris Murdoch 自身のことば、‘it is through enriching and deepening of concepts that moral progress takes place’ を援用しながら、Hugo のこの限界にふれ、だからこそ、社会問題にかかわり、思考の硬直した社会主義運動の指導者 Lefty Todd に左右されつづけ

\* Peter Wolfe : *The Disciplined Heart*, p. 31

る点を論じている\*。

この Hugo の限界は、*The Silencer* の成立過程においての、前述のような感冒治療実験所で彼のかわり方と無関係ではないのである。また、彼の関心が、仕掛花火や無言劇や fantasy-film などの世界の内部でのみ移り変っていることも関連しているであろう。

Hugo すなわち Annadine はつぎのようにいう。

If by expressing a theory you mean that someone else could make a theory about what you do, of course that is true and uninteresting. What I speak of is the real decision as we experience it; and here the movement away from theory and generality is the movement towards truth. All theorizing is flight. We must be ruled by the situation itself and this is unutterably particular. Indeed it is something to which we can never get close enough, however hard we may try as it were to crawl under the net.

この Hugo の現実把握の方法の net の image は、Ludwig Wittgenstein の影響であることは評者一般に指摘されているが、Iris Murdoch 自身、A. S. Byatt に語ったところによると、これは、彼の *Tractatus Logico-Philosophicus* の認識対象の記述方法からとった image であると語ったという。

Hugo の認識対象である、「人間をとりまく各状況」を網でとらえることは、前章でもふれた Bertrand Russell の「記述による知識」と呼応するものでもある。その知識は、対象そのものとは同一ではない。Hugo 自身にはこの差異が峻別されているにしても、現実とのかかわりの中にその認識が根づいているとはいえない。この点が Hugo 限界だと考えられる。*The Silencer* の成立過程もこの限界を暗示しているし、*Under the Net* というときの‘net’の image をもって与えられる認識方法もこの限界を暗示している。

この各状況を把握する方法とは、現実生活の中で、なまなましく生きることによって以外にはあり得ないであろう。「論理」と「現実から遊離した概念」の皮膜を破って、まず Hugo の観点到に Jake は立たなければならないが、さらにそこから先は、現実の中でなまなましく生きることの意味を本当に理解するところまで歩み続けなければならない。

A. S. Byatt は Iris Murdoch の reality についてのことば、‘It is more, and other, than our descriptions of it.’ をかかげているが、Iris Murdoch のこの小説にかけた意図を明示することばである。「網」は、description (記述) によって、認識の対象をとらえる道具にすぎない。Iris Murdoch 自身、この小説の主題が提示する「生きる」ことの実体は、Jake の経験過程を、小説という metaphor に依ってしか表現し得ないであろう。

---

\* A. S. Byatt : *Degrees of Freedom*, (p. 17)  
Iris Murdoch : ‘Against Dryness’

#### 4. The Net からの脱出へ

この小説を読み進めていくにつれ、その哲学的主題の難解さを溶解させ、読者をひきつけていくのは、やはり、いくつもの喜劇的エピソードであろう。手法上からみて、それらについて批判もなされているが、主題とのかかわりの中で、象徴の域にまで高められている写実性豊かな、自然な展開を見せるいくつものエピソードが果たす役割を否定することはできない。その面からの考察もかかせないが、ここではその十分な力量も用意もないので、やはり筋を追いつつ主題の展開をたどっていきたい。

Jake は、Hugo を探して、Dave と Finn と手分けして St. Paul's Churchyard 周辺の酒場をまわり歩く。その途中の酒場で、Dave の友人で、かなり活動もしている New Independent Socialist Party の若い指導者 Lefty Todd に紹介される。ここで Lefty は「現代社会の危機と社会革命；個人の意識と大衆意識の問題；理論と行動の問題；世界の覇者としてのイギリスの幻映を捨てきれない英国知識人の限界」などの問題について、まるで教義問答式に質問をたたみかける。われわれはここで、Jake が次第に接近しつつある現実認識と愛の問題と、巨視的な視点から見渡した人間の問題との対比を示される。この場面では、社会、政治、革命などの巨視的な問題が、前述してきた Jake 自身の生き方の問題である主題を中心として同心円をなして外側へ拡大されていく image を読者に与え、その主題の視点を広げる効果をもっている。しかし、主題そのものが解決されなければ、この視界も空洞化することも同時に暗示されていると考えられる。

Jake, Lefty, Finn, Dave の4人は、夜遅く酒場を出て、General Post Office あたりのかつてのさる寺院の本堂のあととおぼしきところに入りこみ、ひざまで生え茂った草の中に深々とあおむけに寝て、満天の星を仰ぎながら Lefty と話し合う。Lefty に、‘And now, perhaps you'll tell me what it was you were doing in these parts?’ とその夜の会話の中ではじめて政治や革命についての教義問答から離れて、自分自身のことをきかれて、Jake は Lefty に人間的な親しみを感じる。と同時に、しばらくは忘れはてていた Hugo のこと、すなわち、自分がいま追求しなければならない問題を思い出すのである。やはり、いま Jake にとっては、自分の生き方を見出す問題の方が、Lefty に先刻たたみかけられた社会、政治、革命の巨視的な問題に先行する重大な問題であることが暗示されている。

この場面では、*The Silencer* の中で Annadine が、まさに生々しく生きる現実の中では、論理は人間が行為を決断するにあたって何もし得ないことを説くのに対して、Tamarus は政治理論を例に挙げて、何をなすべきかの決断のときに論理の必要なことを主張するが、その部分と対置される形でこの場面が設定され、現実には、Jake がそのどちらの方向に向っていくのかを具象化していると考えられる。



Annadine: When you've been most warmly involved in life, when you've most felt yourself to be a man, has a theory ever helped you? Is it not then that you meet with things themselves naked? Has a theory helped you when you were in doubt what to do?....

Tamarus: My answer is twofold. Firstly that I may not reflect upon theories, but I may be expressing one all the same. Secondly that there are theories abroad in the world, political ones for instance, and so we have to deal with them in our thoughts, and that at moments of decision too. (p. 91)

上記のように、*The Silencer* の中では、'so we have to deal with them in our thoughts' といっているのに対して、この草むらの場面で、Lefty の '...what it was you were doing in these parts?' という質問によって、突然 Lefty の教義問答の呪縛からさめて、'My head felt as if it were on a spring and someone were trying to pull it off. I clutched it violently with both hands.' とそのときの感覚を表現するが、これは単なる誇張ではない。

その意味では、その夜の明け方に、Dave を除いて、Jake と Finn と Lefty が、Upper Thames Street ぞいの Thames 川で泳ぐ場面も象徴的である。現実から逃避し、概念と論理の中に閉塞し、静止している硬直を解きほぐす方向を暗示するかのように、Jake は夜明けも間近い Thames 川の水の中をゆっくり泳ぎながら、体の自由な動きについて考えるのである。

Both arts (Swimming and Judo) depend on one's willingness to surrender a rigid and nervous attachment to the upright position... In fact, however, once one has learnt to control one's body and overcome the primeval fear of falling which is so deep in the human consciousness, there are few physical arts and graces which are not thereby laid open to one, or at any rate made much easier of access. (p. 119)

'surrender,' 'overcome,' 'rigid, nervous attachment,' 'the primeval fear of falling which is so deep in the human consciousness' という語句は、Jake の閉塞した世界と心の奥底に よどむ、現実の大海に対する恐怖とそれからの脱出へという方向を暗示しているに違いない。Jake の生き方の硬直はほぐれだし、Jake にもっともかけていたいままでの硬直した閉鎖的な生活から脱しようとする「意志」 willingness が芽生え出る方向を示しているのである。

一方、Anna は、この間に Jake 会いたい旨の手紙を出していたのであるが、Dave がそれを Jake に渡し忘れていたために、彼が Mime Theatre を訪れたときは、すでに Anna はそこをひき払った後であった。Anna を探し出す糸はまったく切れてしまった。Jake は、ここ 10 日ほどの生活を振り返って、いままでの自分の生活が崩れ始めたことをつぎのように感じ出すが、このことは、上述のいわば「生命の息吹き」との触れ合いの場面と切り離しては考えられない。

It was by now perfectly clear to me that my previous pattern of life was gone forever. I can take a hint from the fates. What new pattern would in due course emerge I had no means of telling. Meanwhile there were certain problems which would undoubtedly give me no rest until I had at least made some attempt to solve them. (p. 127)

前述の、Jake が触れはじめた「生命の息吹き」は、かつての映画界の名犬 Mister Mars との出会いによって、Jake の中に根づいていく。Madge を利用して、Jake の翻訳した Jean Pierre の小説、*Le Rossignol Bois* の原稿を手に入れた Sammy と、さらに大スターの地位を求めて Hugo の会社との契約を無視する Sadie とが共謀してこの *Le Rossignol Bois* の映画化を計る。盗まれた原稿とのひきかえを目的として、Sammy の部屋から連れ出した Mister Mars と常時ともに生活するようになってから、Jake は次第に生命のぬくみに触れいく。Jake は Hugo の経営する the Bounty Belfounder studio で念願の Hugo にはじめて再会するが、そのときちょうどそこで開かれていた Lefty の政治集会に、国粋主義者の団体の闖入が起り、警官隊の出動に遭って、Hugo には、やっと Sadie の裏切りのみを話ただけでその場から逃れる。Mister Mars の演技が警官隊から彼を救うのである。その夜を Victoria Embankment のベンチで Mister Mars と抱き合って明かす。七月中旬とはいえ、London の冷え冷えとする一夜を、Mister Mars の体温にじかに触れながら、貧しかった少年時代を回想する場面は、先の草むらの場面、Thames 川での体験と相まって、Jake を「生命の息吹き」へとひきつけていく点で重要な意味をもつ。

この直後、Madge から、Paris にすぐ来いと電話を受けとり、そこへ赴く途中の船の中で、*The Silencer* を再び手に入れ、それについてもう一度考え直すことの重大さを、はっきりと悟り始める Jake の変化と、この生命との触れ合いはやはり深く結びついていることは否定できない。

As for the book (*The Silencer*) itself, it figured in my mind, not only as a *casus belli* between myself and Hugo, but as a constellations of ideas which I could no longer be so disloyal as to pretend to be discontinuous with the rest of my universe. I must reconsider what I had said. (p. 188)

ここではじめて、Jake は、自分にとってもつ *The Silencer* の意味を直截に語っている。すなわち、Hugo が指し示す生々しい現実の世界と、自分の概念の世界を *casus belli* として、対立的にとらえてはならないこと、自分の概念の世界と自分の全生活との間が裏腹の生活はもはや続けることができないことを悟りはじめたのである。「自分が述べたことを考え直さなければならぬ」——「ことば」に、自分の存在が荷電されはじめるのである。

ここまでたちいたれば、Jake の目には「外観」と「実相」の区別が、かすかではあるが見えてくる。Madge をホテルに訪う前のしばしの間、Seine 川近くを歩きながら見るあたりの景色、

静かな Seine 川の水面に Pont Neuf 橋の描く円形も、彼の「外観」と「実相」との区別の認識へと導く。

...as I wandered towards the Seine I felt sure that, wherever the line was to be drawn between appearance and reality, what I now experienced was for me the real. (p. 189)

かくて、Jake は現実の世界へと接近しはじめる。生まましい現実と遊離した概念と論理の皮膜に包まれた幻想の世界は崩壊しはじめる。

この崩壊にさらに痛打を加えるのは、Jean Pierre Breteuil の最新作、*Nous Les Vainqueurs* のゴンクール賞受賞である。Jake はこれを、Madge に会う前にコーヒー店で知るが、いままで何年も Jean Pierre の作品を「がらくた」と見なし、それを自分の知識と感受性によって、美しい英語に訳してやっていると信じていた。Jean Pierre のゴンクール賞受賞の事実を知って、自分が正確に知り得ていると思っていた Jean Pierre の虚像は、その実像の前に瓦解するのを感じる。

How could I introduce into this picture, which I had known so well for so long, the notion of a good novelist? It wrenched me, like the changing of a fundamental category. (p. 192)

そして、‘Why should I waste time transcribing his writings instead of producing my own? I would never translate *Nous Les Vainqueurs*. Never, never, never.’ というとき、Jake の自分自身で小説を書くことへの「意志」の萌芽がはじめて見られるのである。先に第1章で示したように、Jake が小説を書くことを否定したこと、翻訳について皮肉な調子で語ったときのことばへの不信と、いまの Jake のこのことばとを対比させて、ここまでいたった Jake の経験過程を眺めかえすとき、Iris Murdoch が提示した主題をめぐって、第1章に提示したこの小説が書かれるときの動因となった諸要素が、交錯しつつ、螺旋状に展開するのが見られる。

Jake は、その経験過程をさらに登りつめなくてはならない。それは、Madge に会って、彼女に申し出されたことを前にして、今度こそ、自分の生き方をかけての、ひとつの決断をはたすことによって示される。

Madge は、実はある資本家の意図する英仏合同会社の設立に関係している。そして Jake に、その会社への参加を申し出る。しかも、即金で 300 ポンド、月々 150 ポンドの条件である。即座に、いったん承知したものの、仕事が script-writer であること、さらには、Jean Pierre が重役会の一員であること、第一作は、ゴンクール賞の *Nous Les Vainqueurs* であることをきいて、Jake の心は大きく動揺する。

...As for my conscience, I could catch up with that in a few months.....All I had to do was to shut my eyes and walk in. (p. 198)

いままでの生活から抜け切れるか否かの決断をせまられての Jake のこの低迷は、かつて Madge から離れたとき、実質上「手切れ金」に相当する 200 ポンドを Sammy に出されたが、そのときと、もういち度は、*The Silencer* の出版をめぐる決断をせまられたときの低迷に現われた Jake の「論理」から帰結される‘fatalism’の亡霊である。いま、Madge の申し出を前にして、彼には一瞬、その亡霊こそ実体だと思える。‘I seemed to be throwing away the substance for the shadow.’

しかし、この亡霊と実体とは、Madge から Mister Mars の年齢がすでに14才であり、死期も近いことをきかされて、その位置を逆転する。いままでの経験過程を通して、幻想の網の下から脱出しかけ、その外にある生々しい現実の大海に身を浸しかけたとき、彼にその体温を通して、みずみずしい「生命の息吹き」に触れさせた Mister Mars の死期が近いことを知って、Jake は、自分の人生を、時間の眺望の中に位置づけて見る視点をここで与えられるのである。そして、「網」からの脱出へと彼をつき出す自分の「意志」による決断が、ここではじめて果たされるのである。Tamarus はかつて *The Silencer* の中で、決断には論理がかかせないことを語った。しかし、この決断を果たさせたものは、Tamarus のいう論理ではなかった。

...I was thinking about Mars. Mars was old. He would do no more work. He would not swim flooded rivers any more, or scramble over high fences, or fight with bears in lonely places. His strength was waning and his intelligence would avail him nothing. He would soon die. This discovery completed the circle of my sadness; and with it my resolution crystallized. (pp. 199~200)

Shakespeare の作品に最大の賛辞をおくる Iris Murdoch が\* Mars を通して Jake が生と死の対照を直感したときのこの感概を描くにあたって、Hamlet が Yorick の頭蓋を手にして、それに語りかけるあの墓掘りの場面が、彼女の脳裏に彷彿としていたと考えられないであろうか。また、前に引用した、Jean Pierre の作品を翻訳しないと決意したときの‘Never, never, never.’にも King Lear の嘆きがかすかに響く。

いずれにしても、いままでの Jake の経験過程がこの決断の一点に収斂していることは確かである。‘Why, Jake, why?’と、申し出を断わる Jake につめよる Madge に、彼は、‘I don’t know very clearly. I only know it would be the death of me.’と答える。このとき、自分のなした決断の意味がはっきりわからないということは「経験」というものの本質を示しているのではなからうか。自分の生き方をかけて決断し、行為したあとで、それが眺めかえされ、組織

\* ‘Against Dryness’, ‘The Sublime and the Beautiful Revisited’ 参照

され、統一されて概念や思想は、現実と乖離することなく形成されていくものではなからうか。

「経験」とはそういうものではなからうか。

この決断を果たした Jake の眼には、はじめて Madge が、彼の根無し草の生活、幻想の呪縛から離れて、一個の独立した他者として見えはじめる。Jake を、自分のそばから離すまいとする Madge を振り切って、Jake は Madge のもとを去る。

...Madge was lancée, nor could I know after describing what parabola she would finally return to earth. (p. 200)

‘The fact is that I must live my own life. And it doesn’t lie in this direction.’ (p. 201)

Madge との訣別は、これまでの根無し草の生活との訣別を印す瞬間だったようである。

## 5. 現実への根づけ

Madge の申し出を拒否したときの Jake の決断は、Mars の死期が近いことを知って、自分の人生を時間の眺望の中に位置づけ得たことが直接の動因になっていると解釈できるが、それとあわせて、これまでいたる体験の集積の存在を忘れることはできない。前述のように、この決断は、これまでの「根無し草の生活」からの脱脚、「網」からの脱出を象徴するものではある。しかし、その体験を、自分からひき離して客観化し、統一し、組織して、もう一度、自分の生き方の中味としてひきもどすのでなければ、その体験は、本当の意味の経験として、彼の生活には根づかないのである。この先においては、その意味での Jake の経験過程が描かれていく。

Madge のホテルを出た後、Jake は、自分が彼女の申し出を断ったときの決断に、強い後悔の念を抱く。このときの Jake の動揺は、これまでの彼の生活を考えれば、きわめて自然なものであり、それはそのまま、説得力をもって読者にせまるが、そこにはまた、人間の経験過程がたどるべき弁証法的展開への、Iris Murdoch の洞察をこそ読みとるべきであろう。そして、この先、前述の意味で、体験が Jake の生活に根づくためには、どうしても彼がいままで自己閉塞的な生活の中でこしらえあげてきた Anna, Hugo, Finn についての、幻想像の崩壊と消失がなければならない。

Madge と別れた直後、自分の決断について、後悔の念にかられながら、‘The money. The heart of reality.’ を失ったと、心に叫びながら Paris の街を歩くが、一方において、Jean Pierre のゴンクール賞受賞を思えば、Madge の申し出た対して示した決断の意味へと想念はたちもどる。

All that mattered was a vision which I had had of my own destiny and which imposed itself upon me as a command. (p. 206)

この両極にまたがる振幅をたどりながら、Jake の体験は、現実認識と他者の存在の独立性と愛の意味の確認へと、さらに収斂されていく方向をたどる。

Anna を求めて、パリ祭の雑踏の中に出た Jake は、the Pont Neuf で、人波にもまれながら、打ち上げられる花火を見ている。そして、反対側の岸に突然 Anna を発見する。Seine 川の鏡のような水面、そこに映る無気味な Notre-Dame の影、Belfounder の花火のつかの間の美、人波、Tuileries 庭園の木々など、すべては Jake の幻想の世界のたたずまいである。その中で、群集にさえぎられて、Anna に近づけない状態は、Jake の Anna をとらえ得ないいらだちを象徴する。花火は終る。Anna が動く。Jake は追う。ほかに人影のない Tuileries の庭園の中で Anna の後を追う Jake は、しばし、二人が神話の世界にいるかのような幻想さえ楽しむ。靴ずれのためか、Anna は靴を木の根もとのくぼみに置いて、さらに林の中の小径を歩む。彼は靴をもって Anna に従う、ついに追いついて、Anna を抱こうとしたとき、それは Anna ではなかった。自あてにした白いブラウスにあざむかれて、Anna を林の中に見失ったことを知る。彼の手に残ったものは、先程 Anna が脱ぎ捨てていった一足の靴でしかない。先刻のパリ祭の雑踏と神話の幻想の世界と対比される林の静寂の中で、Anna の靴をさげて、その靴の置かれた位置さえも確かめ得ないで一人立ちつくす Jake の姿は、Jake がこまごまと描写した Anna 追跡の道筋が暗示する「網の目」によって、彼の幻想の世界の Anna はとらえ得ないことを象徴している。

Anna を見失って、自分の幻想の世界が崩れ去ったことを知った Jake の打撃は大きい。Jake は、Goldhawk Road の Dave の部屋で、寝たまま無為に一週間ほど過す。これは、いままでの Jake の生活の崩壊から、新たな生活へ向って動き始めるまでの回復期であり、このときの静止状態から、つぎの行為への Jake の生活の展開は、この小説の前半の寄生の場を求めて駆け回る Jake の動きと対置されている。幻想の海から現実の岸に打ち上げられて後の、いわば仮死状態の間、そばに Mars がつき添うようにして Jake のベッドのそばにいること、そして、Jake を戸外へ導き出すのも Mars であることは、前述の Mars の位置づけとあわせて注目しなければならない。

Jake は Dave の住居の向いにある病院へ行って雑役夫としての職を得る。かつては Dave からも、Lefty からも定職をもつことをすすめられたが、寄生生活にうずくまろうとする Jake には、仕事は無縁であった。しかし、いまは労働を通して、現実とかわるなかで、労働と思索の関係について考えるようになる。ここで Jake は、現実と概念の世界は、人間が常にその両者をつなぎとめて生きるののであれば、両者は遊離し、空洞化する危険が存在することに気づき始める。そして、これはまた、Simone Weil が *L' enracinement* の中でくり返し説くところでもある。

Such intellectual work as I have ever accomplished has always left me with a sense of having achieved nothing:.... If one no longer feels in living contact with whatever

thought the work contains, the thing at best dry and at worst stinking ; and if one does still feel this contact the work is infected through it with the shifting emptiness of present thought. . . . I wonder if Kant, as he convinced his Copernican Revolution, said to himself from time to time, “ But this is nothing, nothing ”? I should like to think that he did. (p. 234)

Iris Murdoch は、倫理の問題として、人間とそれととりまく状況の認識と理解の在り方を、‘ Idea of Perfection ’ の中で論じている。彼女は、その認識と理解の根底を、 Simone Weil の指す ‘ attention ’ (対象への注視) に置き、知識、意志、理性が、対象への忍耐強い、親愛に満ちた attention を通して深められ、豊かにされて、「意志」が選択の余地を残さない ‘ necessity ’ (必然)、 ‘ obedience ’ (必然への忠順) によって埋めつくされて、行為が果されるとき、それを「善」と名づけている。この観点から、一方において、 existentialism が、状況の個性性を主張し、行為の選択にあたっての意志の内包の空洞を無視する点を批判し、他方においては、 Kant が、倫理的行為の達成の目標として、 Idea of Reason を目指している方向に同調を示しながらも、現実と理念の間に横たわる里程への洞察の欠如を批判している。

Jake が、病院で仕事をする中で、現実界と概念界との分離の危険性に開眼しはじめ、そのとき、彼が Kant に言及している点は、この Iris Murdoch の Kant 批判と重なっているといえよう。しかし、それは、この小説のはじめの部分で、根無し草の生活をしながら見せた Kant への冷笑ではない。むしろ、Kant に言及しながら、自分の生活が、現実の中に根づくことへの希求の表現と受けとれる。

Jake は、仕事に対して、自分の責任さえ感じはじめる。

…As I walked quickly along, passing unfamiliar people in white coats, they on their task and I on mine, I felt like a man entrusted with an important mission. (p. 229)

これはまた、 Simone Weil の仕事を通しての「人間の魂の根づけ」の思想と共通しているといえよう。

L’initiative et la responsabilité, le sentiment d’être utile et même indispensable, sont des besoins vitaux de l’âme humaine.\*

このように、現実の中に歩み出したとき、 Lefty の政治集会での乱闘で頭に負傷した Hugo が入院してくる。いままで追求してきた Hugo と、ついに対面でき、語り合ってみれば、いままで Hugo, Anna をめぐって、 Jake が組み立てた想像は、すべて幻想に過ぎなかったことがわかる。

\* Simone Weil : *L’enracinement*, (p. 12)

なかでも、Anna が愛したのは Hugo であり、Hugo は Sadie を、Sadie は Jake を、Jake は Anna を愛していたという。自分の想像は、まさに Lefty が、Jake と語り合った一夜を表現した如く、‘A Midsummer Night’s Dream’ に過ぎなかった。Jake は、自分の幻想の世界の完全な崩壊を認めざるを得ない。

この小説の展開は、あの Madge の申し出を前にして果たした決断を軸にして、小説の前半と後半が、対称の位置に対置されていることは明らかである。

ここで、Jake のこれまでの経験の総体は統一されて、彼の概念の世界の空洞を満たし始める。「記述による知識」、「論理の網」によってはとらえ得ない「愛」の意味が、Jake の経験過程の総体を内省する中から導き出されてくる。

「他者」は、「記述による知識」、「論理の網」では把握し得ない。人間の理解は、ことばによる表出を拒否する。そういう意味での不可解を認識した上で、「他者」は自分とは独立して存在するという認識がはじまる。Jake は、Anna を、この意味での、自分とは独立して存在する他者として認識しはじめる。この理解をふまえて、さらにその Anna に対して感じる「近づき」の希求も、ひとつの愛の姿であると Jake は悟る。少なくとも、「他者」を不可解な存在と認め、その他者と共存して相対することも「愛」のひとつの姿であると悟る。「愛」の認識のためには、「知識」の無効性を認め、「知識」に対する希求を捨て去るところから、人間の理解がはじまるとさえ考える。

It seemed as if, for the first time, Anna really existed now as a separate being and not as a part of myself. To experience this was painful. Yet as I tried to keep my eyes fixed upon where she was I felt towards her a sense of initiative which was perhaps after all one of the guises of love. Anna was something which had to be learnt afresh. When does one ever know a human being? Perhaps only after one has realized the impossibility of knowledge and renounced the desire for it and ceased to feel even the need of it. But then what one achieves is no longer knowledge, it is simply a kind of co-existence; and this too is one of the guises of love. (p. 268)

いままで追求してきた Hugo に対しても、彼が表象の意味でしかなくなり、人間理解の糸口でしかなかったと悟る。そして、Anna に対すると同様に、そこから新たな関心を Hugo に対して覚え始める。

ここまでいたれば、いままで決して Ireland へは帰るまいと信じていた Finn が、Ireland へ帰ったという手紙を受けとって、もはや Jake は、いままでの Finn に対する理解の浅さに恥じるばかりである。また、いままでの経験過程の中で、「生命の息吹き」を根づかせてくれた Mars を、他者を手段としか見なし得ない Sammy の手から 700 ポンドで買いとるのである。

ここまで到達した Jake の変化の中で、上の引用文中に見られる、‘to keep my eyes fixed



upon where she is' という表現を見落してはならない。これは、前述の、Simone Weil の指す、'attention' にほかならない。幻想をのがれて、現実をありのままに見ようとする、Jake の内部から発せられる視線が Jake の中に定着したのである。そして、その視線をもって現実をとらえようとし、自己の体験は内省され、組織・統一されて客観の域にまで高められ、それを自分の生活の中にくりこむことを通して、認識対象についての概念の中味がうめつくされていく。そのとき、現実生活と概念との結合の「いのち」はまもられる。Jake が、上述のように、いままでの経験の軌跡を内省する方向へとたどるこの小説の終局は、その過程を物語っている。

最後に、Jake は現実生活の中では、真実は、瞬間的にしか、かい間見ることが許されないことを悟る。これは、過去から未来へと流れ去る時間の眺望の中に自分の人生をおさめ、その中に位置づけ得たことを意味する。人間の意志、期待、信念とは無関係に流れる現実身に身をさらして生きることにしか真実を把握する術はないとする生き方の必然でもあろう。

Jake は、Mars とともに、新たな生活と新たな生活の場を求めて、Dave の部屋を出てバスに乗る。かつて、Anna を求めて乗った時と同じ座席から窓外に流れる人ごみを見ながら、つぎのようにいう。

All work and all love, the search for wealth and fame, the search for truth, life itself, are made up of moments which pass and become nothing. Yet through this shaft of nothings we drive onward with that miraculous vitality that creates our precarious habitations in the past and the future. (p. 275)

ここには、人間に内在する生きることへの意志と、それにともなう悲哀が共存している。しかし、この認識を経て、Jake には、いま、静かに、確実に、自分自身の人生の意味をとらえ得たという実感が根づくのである。

Like a fish which swims calmly in deep water, I felt all about me the secure supporting pressure of my life. Ragged, inglorious, and apparently purposeless, but my own. (p. 282)

## あ と が き

「まえがき」では、この小説の主題は、要約すれば、「論理と概念の世界」と「現実と生活」との靱帯の復活を通しての、人間生活そのものの復活であると述べた。わたくしは、Jakeの経験の軌跡が、それを提示していると考えて、小説の筋を追いながら、その主題の展開をたどってきた。その中で、上述の靱帯の復活をさまたげているのは、現実の生活から遊離した論理と概念によってくみだされた幻想の世界に閉塞する Jake の生き方であり、もうひとつには、Hugo のもつ現実認識と人間理解の限界であった。彼は Wittgenstein や Bertrand Russell の認識方法の援用とも見られる議論を展開して、人間をとりまく状況の偶然性と個別性を主張しながらも、現実の生活では、その先の現実と人間理解へと志向する方向性をもち得なかった。*Under the Net* という題名の‘Net’には、この Jake と Hugo の二重の限界が象徴されていると考えられる。

Iris Murdoch は、まず Jake が幻想の網から解き放たれながら、Hugo の指し示す生き方に近づいていく彼の経験の軌跡を描き、さらに Hugo の限界を悟って、そこを脱出し、自分の人生を、錯雑した現実の中に根づかせていく過程を描いたといえよう。

Iris Murdoch は、この中で、ことばによる表現を拒否する現実と人間の存在の姿を、小説という表現形式を用い、そのみの果たし得る機能——彼女が芸術に見出す‘metaphor’の威力——を生かして、それを提示し得たといえよう。ここで、Iris Murdoch が、小説家としての自律性をもって、新たに生まれたといえよう。

*Under the Net* は、Iris Murdoch を、「哲学的小説家」としてではなく、「哲学者であると同時に小説家」として位置づけるとともに、小説そのものの存在理由をも再確認させ得ているところに、その大きな意味があると考えられる。

Of course we are dealing with a metaphor, but with a very important metaphor and one which is not just a property of philosophy and not just a model. (*The Sovereignty of Good over Other Concepts*, p. 93)

## 参 考 書 目

- Bertrand Russell: *My Philosophical Development*. George Allen & Unwin LTD, 1959.
- Simone Weil: *L'engracinement*. Gallimard, 1963.
- Peter Wolfe: *The Disciplined Heart: Iris Murdoch and Her Novels*. University of Missouri Press, Columbia, Missouri, 1966.
- Bertrand Russell: *Logic and Knowledge: Essays 1901—1950*. George Allen & Unwin LTD, London, 1968.
- Rubin Rabinovitz: *Iris Murdoch* ('Columbia Essays on Modern Writers,' No. 34) Columbia University Press, 1968.
- Stephen P. Ross: *Literature & Philosophy: An Analysis of the Philosophical Novel*. Meredith Corporation, New York, 1969.
- Kenneth Allsop: *The Angry Decade: A Survey of the Cultural Revolt of the Nineteen-Fifties*. Peter Owen Limited, 1969.
- A. S. Byatt: *Degrees of Freedom: The novels of Iris Murdoch*. Chatto and Windus, 1970.
- Iris Murdoch: 'Thinking and Language' *Proceedings of the Aristotelian Society*. Supplement 25 (1951)
- 'Against Dayness: A Polemical Sketch', *Encounter*, 16 (January 1961).
- 'The Darkness of Practical Reason,' *Encounter*. 27 (July 1966)
- Political Morality,' *The Listener*, 78 (September 1967)
- Iris Murdoch: *The Sovereignty of Good*. Routledge & Kegan Paul, 1971.
- Majorie Grene: *Introduction to Existentialism*. The University of Chicago Press, 1970.

ミケル・デュフレンヌ, 長谷川宏訳「言語と哲学」セリカ書房

ギュスドルフ, 笹谷満, 入江和也訳「言葉」みすず書房

バートランドラッセル, 江森巳之助訳「バートランド, ラッセル著作集—4」みすず書房

吉本隆明「吉本隆明全著作集—4」勁草書房

大木 健「シモーヌ・ヴェイユの生涯」勁草書房

大木 健「シモーヌ・ヴェイユの不幸論」勁草書房